

陳舜臣さんを語る会通信

NO.47 Sep. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年9月20日

『風よ雲よ』と『旋風に告げよ』は二部作 本号では後者を取り上げました

『旋風に告げよ』は、1974年11月26日～1975年11月30日、京都新聞に連載されました。単行本では講談社(1977年)があり、文庫本では講談社文庫(1982年)があり、更に文庫本で、1999年、中央公論新社から『鄭成功 旋風に告げよ』と改題の上、発行されました。(編集委員 橘雄三)



講談社単行本表紙

講談社『陳舜臣全集第十巻』
「陳舜臣論序説」稲畑耕一郎より
抜粋・引用 傍線は編集委員の加筆

明・清二朝に仕えたという事実は、呉偉業の生涯を暗く重いものとした

呉偉業という詩人がいる。明末清初に最も高い詩名を謳われた人物である。陳舜臣の『風よ雲よ』の「劫火」の章の冒頭には、その代表作である「円円曲」が紹介されている。

「円円曲」は、唐の白居易の「長恨歌」にも比せられる長篇叙事詩である。遼西を守った明の將軍吳三桂とその愛妾である陳円円のロマンスを詠いながら、内に吳三桂が一人の女性を得んがために、山海関を開いて清軍を引き入れ、「亡国」へと導いたことに対する諷刺がこめられている。当時の呉偉業の憤懣と無念さが託されている。明の滅亡は、一六四四年、呉偉業三十六歳のときのことである。

この年、南京に、監国福王の亡命政権が樹立された。明王朝の再興、北への反攻をめざしたものであった。呉偉

業も招かれて、少詹事という位に就く。しかし、福王政権内は、抗争に明け暮れており、呉偉業は失望して、わずかに二ヶ月で、病を口実に家に帰る。

そんな呉偉業に対し、江湖の人心を収攬するために、野に遺賢を求めた清朝は、詩名高い呉偉業を放っておかず、幾度も出仕を働きかけた。はじめ病と称して固辞していたが、遂に拒みきれず北京に赴くこととなる。

呉偉業が清朝に仕えたのは、二年あまりの期間にすぎず、やがて継母の喪を口実として江南に帰ってくる。しかし、二朝に出仕したという事実は消えることなく、これ以後の彼の生涯を一層暗く重いものとした。

歴史の襞に落ち込んだ人々を掬いあげるのが「文学」の仕事

清の入関を援け、その全土制圧の基盤を作った吳三桂が、後年これに叛旗を翻し、それを指弾した呉偉業が、やがて清朝に膝を屈したことは、皮肉な歴史の展開といってしまうには、あまりにも傷ましい。彼らは、何のために戦い、何のために苦しまねばならなかったのか。王朝のためか、民族のためかあるいは自己の名誉のためか……。

この間の釈然とせぬ何かを掬いあげるのが、「文学」という仕事ではないのだろうか。歴史の襞に落ち込んだ人々を掬いあげるのは、「歴史学」の仕事ではなく、「文学」の領域によりふさわ



わしいように思われる。陳舜臣の作る「歴史文学」の世界は、まさにそうした試みの実践であると、私には思われる。人間の長い歴史にも、人の短い一生にも、曰く言い難いことが少なからずあるのではないか。それは、「文学」という形を通して始めて表現できるもののように思われてならない。

陳舜臣が『風よ雲よ』に描く吳三桂、李自成、『旋風に告げよ』に描く鄭芝竜、鄭成功などは、正も負も、いずれも一面的な評価から描かれているのではない。彼らの生涯や事蹟を一刀のもとに断つのではなく、さまざまな陰影をつけて、読者の眼前に提示している。彼らの実像がそうであったかどうかはともかく、少なくとも激動の時代の中に生きる赤い血の通った人間としてのキャラクターをもって登場してきている。それが『風よ雲よ』『旋風に告げよ』という小説を支える魅力である。

■右の画像は厦門港から見た、鼓浪嶼の巨岩に立つ鄭成功像。霧がかかり写りが悪い。編集委員撮影

『鄭成功』あらすじ&主な登場人物

[中公文庫『鄭成功』キャッチコピーより]

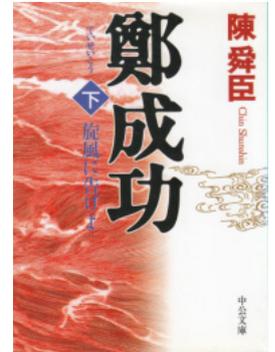
上巻 国姓爺鄭成功、幼名福松は、東アジアの海の実力者を父として、日本人田川氏の娘を母として、平戸に生まれた。七歳のとき福建泉州へと渡り、父のもとで成長、やがて南京の太学に学ぶ。折しも李自成軍に首都北京を占領された明朝は滅亡、山海関を越えた満州鉄騎軍は中国大陸制圧に向けて怒濤の南進を開始した。唐王隆武帝を奉じ、父とともに反清勢力を率いることになった若き英雄の運命は？

中公文庫版(上)表紙 →



下巻 父芝竜は形勢の不利を悟り、清朝の招撫を受けて投降するが、鄭成功はなおも抗清復明の志を曲げない。東南沿岸部を拠点に、日本や南海諸地域との貿易活動によって得た潤沢な資金を財政基盤として、強力な水軍を統率、長江をさかのぼり南京を攻囲する。幾たびの悲運、敗戦にも屈することなく、のちに台湾からオランダ勢力を駆逐した鄭成功の感動的な生涯を、東アジアの海を舞台に描く歴史長編。

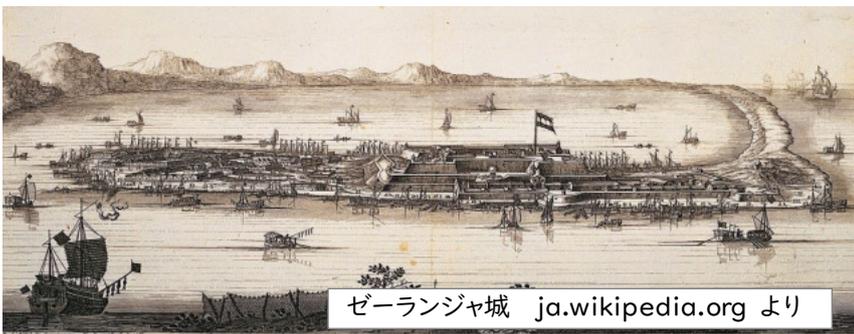
中公文庫版(下)表紙 →



主な登場人物

- **鄭成功(ていせいこう)** 父・芝竜と日本人妻・多喜とのあいだに平戸で生まれる。幼名・福松。七歳で福建に渡り森と改名。国姓爺ともいう。南京の国士監で学び士大夫の教養を身につけ、大義一途に進む生き方は、利害で動く父と対立する。
- **董氏(とうし)** 鄭成功の本妻。姉さん女房。
- **鄭経(ていけい)** 鄭成功の長男。
- **鄭芝竜(ていしりゅう)** 海商団の首領。顔思齊の後継者として福建に勢力を張り、南海を制覇。功利で動き明朝、清朝に二股をかける。
- **顔思齊(がんしせい)** 平戸を拠点とする半商半盗の海商団の首領。のち、台湾北部に根拠地を移す。
- **林田統太郎(りんたんとくたろう)** 顔思齊の息子。お蘭の異母弟。絵描きで雅号は統雲。中国では林統雲と名のる。
- **お蘭** 父・顔思齊の死に疑問を持つ。切支丹(キリシタン)の危険を感じ日本を脱出。大陸・台湾を巫女に身をやつし動きまわる。中国名は顔金蘭。
- **吉井多聞(きちいたもん)** 医師。お蘭と行動を共にする。
- **陳方策(ちんほうさく)** 南京の国士監での鄭成功の親友。
- **張少珠(ちんせうしゆ)** 鄭成功が南京で学んでいたころ馴染んだ妓女。のち、陳方策の妻となる。
- **甘輝(かんき)** 鄭家水軍の勇名高い智将。のち鄭成功軍の副官。
- **施琅(しろう)** 鄭成功軍の有力幹部で作戦の神様。成功との溝が深まり抜き差しならないところまで行き、清に投降。
- **崇禎帝(すうてい)** 明朝最後の皇帝。李自成に北京城を包囲され、皇后を自殺させ、娘を斬り、自らは、裏山(現在のは景山)で自縊。
- **李自成(りじせい)** 宿場人足から身を起こした勇将。北京を陥し、帝位につくが、たちまち、呉三桂らに追い払われる。

- **呉三桂(ごさんけい)** 山海関を守っていた明朝の猛将。李自成が紫禁城を包囲すると清と結び北京へとつて返す。清の入関後、四川と雲南の藩王に封じられる。のち、清朝に叛くも病死。
- **順治帝(じゆんちてい)** 六歳で清朝第三代皇帝となる。一六四四年、北京に入る。
- **ドルゴン** 順治帝の叔父で摂政王。太祖ヌルハチの第十四子。のちに順治帝の実母と結婚。
- **福王** 万曆帝の孫。崇禎帝亡き後、南京に立った皇帝。不徳を一身に集めたような人物で、即位一年余で清軍に捕まり殺される。
- **唐王** 鄭一族の支持で福建省福州で皇帝となり、隆武帝と名乗る。以後、唐王の位は弟に譲る。のち、隆武帝が清軍に捕まり処刑されると、弟の唐王が紹武帝と名乗る。
- **魯王** 名は以海。紹興で監国となる。鄭彩、鄭聯兄弟に支えられる。
- **桂王** 隆武帝の死後、皇位につき永曆帝と名乗る。鄭成功に支えられる。
- **朱舜水(しゆしゆんすい)** 儒者。監国魯王に仕え、軍資金調達に日本におもむき、統雲と出会う。鄭成功の北伐に熱願して参加。のち、日本に帰化。水戸学に影響を与えた。

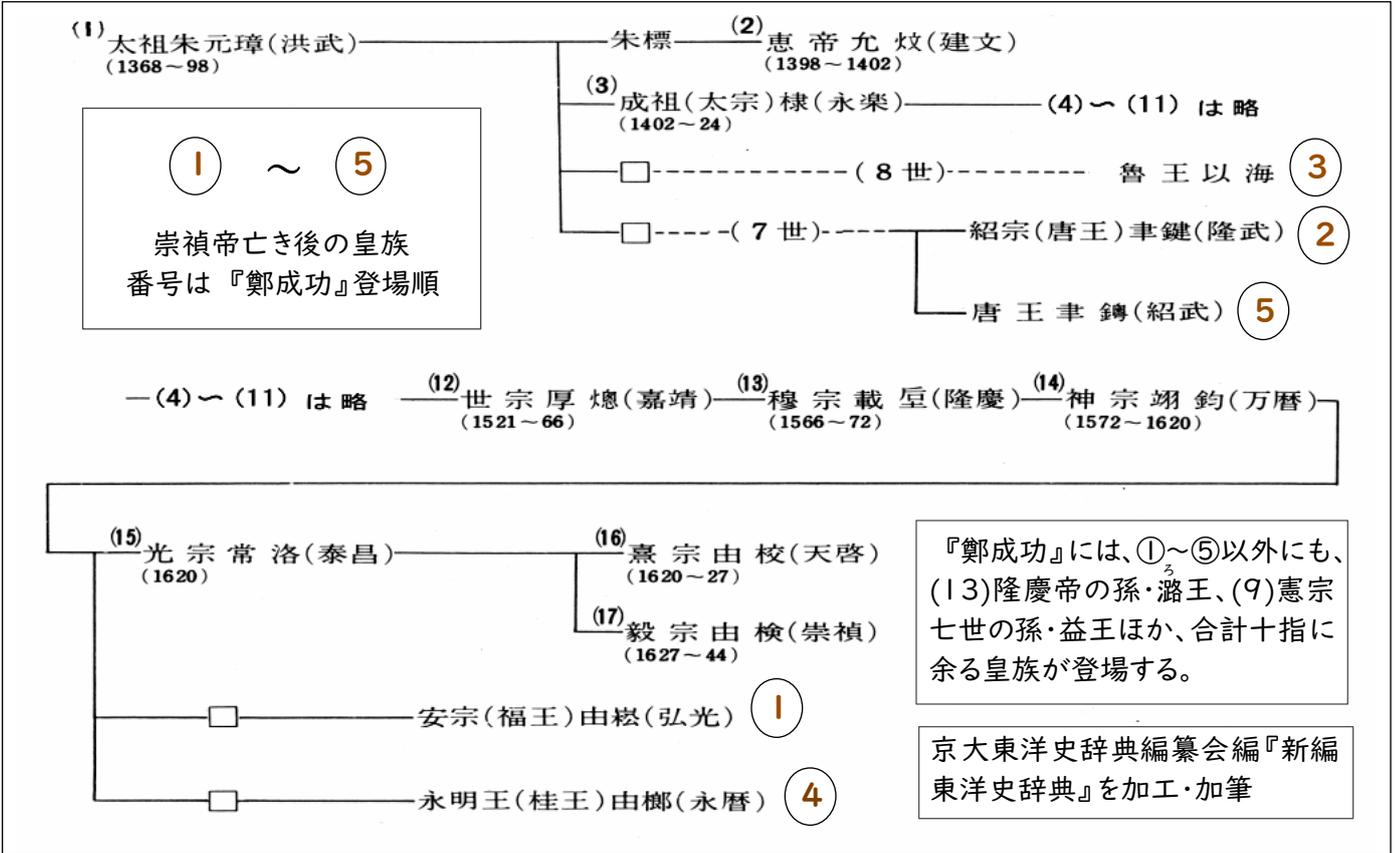


ゼーランジャ城 ja.wikipedia.org より

陳舜臣さん、崇禎帝亡き後に立った十指を超える皇帝、監国を詳述

崇禎帝亡き後、皇帝、あるいは監国と称する皇族が、『鄭成功』に登場するだけでも、十指を超えます。陳さんは、鄭一党との関わり、皇族同士の争いなどを、「追われる者」「聖駕進まず」「悲報」「愚かな争い」などの章を設け、詳述します。これは、鄭成功の大義・北伐を描く上で必要だったのでしょう。

監国■なにかの理由で皇帝がいないとき、「国政を監督する」のが監国。準皇帝。



鄭成功は台湾の英雄!?

中公文庫『鄭成功』から引用します。

オランダが台湾にゼーランジャ城を築きはじめたのは、鄭成功の生まれた一六二四年のことである。この城は一鯤身島上にあり、現在の安平である。国姓爺進攻の噂がときどき出はじめたころ、鹿耳門の湾内にもう一城を築造した。これがプロビンシア城で、漢人は赤嵌城と呼んだ。(下p. 379)

《1. ゼーランジャ城遺跡—安平古堡—》

画像は、ゼーランジャ城の古跡に立つ「民族英雄 鄭成功」の像です。(ja.m.wikipedia.orgより)



《2. 鄭成功とオランダ人の和議の像》



赤嵌城(プロビンシア城)は、1721年の朱一貴の反乱の時、破壊され、現在、目にする赤嵌楼は後世の建築です。赤嵌楼は台南観光では、はずせない定番のスポットになっています。この赤嵌楼の庭に「鄭成功議和圖」が立っています。この像は、オランダを降伏させた鄭成功(右から2番目)と降伏するオランダ人(左手前、後ろ向きの人物)が対面する場面です。オランダ人がちょっと気の毒。(編集委員撮影)

掲載紙 京都新聞の連載予告記事(1974.11.23)及び連載第1回(11.26)

次の連載小説



作者のことは 日中混血児 国籍無効 鄭成功、旋風を中心とした物語をかきたたい。日本は徳川の本拠地となり、中国では



陳舜臣 辰巳一平 画

朝刊に連載中の村上元三氏作「流雲の賦」は、好評のうちに十一月二十五日で終わり、続いて二十六日から陳舜臣氏の新時代小説「旋風に告げよ」を連載します。陳氏は「枯草の根」で江戸川乱歩賞、四十四年には「龍玉舞子香」で直木賞を受けて以来、流行作家として広く活躍中であるといえるまでもありません。国策は中国で神戸生まれの同氏の作品には「阿片戦争」など中国に題材したものが多く、これは周知の通りです。本紙に初登場の陳氏が著く「旋風に告げよ」は、明から清へ大きく移行していく中国の動乱期を舞台に、明室復興のため幾たびか大陸反攻を試みる超人的英雄・鄭成功の青春を描く人間ドラマです。さらには劇画のタッチと切り絵の技法を凝入して独特の画風を完成した辰巳一平氏が担当します。ご期待ください。

作者のことは 日中混血児 国籍無効 鄭成功を旋風の中に置いて物語をかきたたい。日本は徳川の天下となったばかりで、中国では明が亡びて清が興こううとして、南海ではポルトガルの勢力がようやく

おとろえ、イギリスの東インド会社が、オランダのあとを追ってはげしい商戦をくりひろげつつあった。このように時代と舞台のスケールには不足はない。作者はただだ思う存分に筆をふるって、読者の期待にこたえたいと思うだけである。



明が亡びて清が興こううとしている。南海ではポルトガルの勢力がようやくおとろえ、イギリスの東インド会社が、オランダのあとを追ってはげしい商戦をくりひろげつつあった。このように時代と舞台のスケールには不足はない。作者はただだ思う存分に筆をふるって、読者の期待にこたえたいと思うだけである。

京都新聞社

『陳舜臣 新聞連載小説一覽』 (編集委員作成)

陳舜臣 辰巳一平 画

『陳舜臣 新聞連載小説一覽』 (編集委員作成)

連載時題名(のち改題)	掲載紙	連載開始期間	通信掲載号
1 孔雀の道	神戸新聞	1968.5.12 ~ 1968.12.31	41
2 風よ雲よ	北海道新聞(夕)	1971.6.15 ~ 1972.6.27	46
3 旋風に告げよ(鄭成功)	京都新聞	1974.11.26 ~ 1975.11.30	47
4 桃花流水	朝日新聞	1975.7.1 ~ 1976.11.10	16
5 珊瑚の枕	山陽新聞	1980.6.24 ~ 1981.4.11	40
6 曼陀羅の人	読売新聞	1982.4.1 ~ 1983.7.13	21
7 波の残影(相思青花)	新潟日報	1984.6.12 ~ 1985.6.15	44
8 天外の花(戦国海商伝)	産経新聞	1988.8.15 ~ 1989.9.15	42
9 夢ざめの坂	徳島新聞(夕)	1989.9.1 ~ 1990.9.5	45
10 チンギス・ハーン一族	朝日新聞	1995.4.5 ~ 1997.5.31	32
11 天球は翔ける	毎日新聞	1999.1.1 ~ 1999.12.14	38
12 青山一髪(孫文)	読売新聞	2002.5.13 ~ 2003.6.22	8

※地方紙の場合、複数紙が掲載します。その場合、各社、開始の時期にずれがあるのが普通です。